## な姨捨にまつわる川柳・狂歌

柳と狂歌が載る文献が手元にありまし 575のリズムの れています。さらしな姨捨にまつわる川 れた時代には、 たびたび登場しました。ドラマで描か の時代や為政者についてユーモアや風 まず川柳からです。 やはりおかしみのある 「川柳」も盛んに作ら

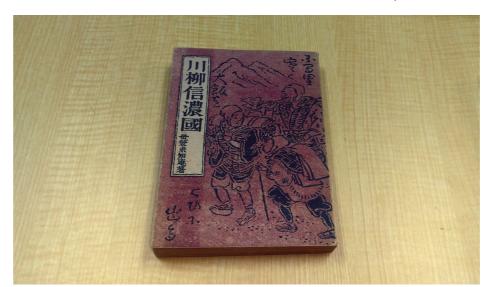
國」(母袋未知庵著)です。 松本市のしなの川柳社が出 江戸の川柳雑誌「柳多留」 この本は

> もよく分かる構成になっています。 人が江戸っ子からどう見られていたか 信濃の人間ではなく江戸の人 その意味で当時の信

が、その中ですぐ暗記してしまったのが だったのでいくつも川柳が載っています さらしな姨捨は、 やはり江戸でも有名

## 月が見て居たので姨を背負い戻し

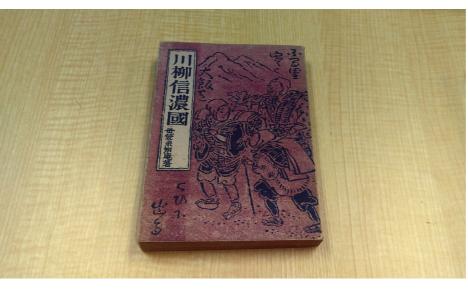
姨捨山の頂上に母親を捨て置いて村の



# 五六杯喰らって伯母を捨てに行き

早乙女の笠も田毎の昼の月 月が見て居たので姨を背負い戻 月を眺めて御座れよと姨を捨て 田毎程信濃へ団子盛ってやり キックリチョンと鏡台へ月が出る 月のやう並ぶ田毎の田植笠 おひおひと月に泣いたる名所也 姨捨は道のわからぬ世の話 更科で蕎麦ばかり喰う不風雅さ 風吹くと田毎の月は皺になり 鏡台にうつして眺む月の眉 鏡台の月あの田にもこの田にも 賑かさ田毎にうつる田植笠 信濃から来て名月を一つ見る 人情に欠けても月は名所也 大飯を食ひ沢山な月を見る

姨捨の山のつきかげあはれさにうしろにおひて帰るまで見つ 人月をおしむ心のあらはれて我が影法師ものびあがりけり (高住) (真顔)



# うしろにおひて帰るまで見つ

地への来訪時に詠んだ歌です。 地方に狂歌を広めた功労者だそうで、 者とうわさされた大田南畝の弟子です。 といふて夜もねられず」という倹約を奨 した老中松平定信を批判する狂歌の作 中に蚊ほどうるさきものはなしぶんぶ

老婆を山に捨てに行くとき載せる背中の まりにもあはれなので背中に背負って帰 ていることから、 を感じますが、 イメージと重なるのでややパロディ でいます。「うしろにおひて」の表現が、 りたいほどだ」という心の感動を詠ん に括られますが、「姨捨の月の光りがあ 「帰るまで見つ」と続け 何度も振り返って月

## わが影法師ものびあがりけり

さらしな姨捨の名月が明け方、

ことはできないと我に返った息子の真面

によると、江戸時代、信州から農閑期の説文もあり、読み応えがあります。それを収集した著者母袋未知庵さんによる解 子たちの作った川柳が次。 だとからかわれていたことが分かるそう うした人たちは江戸っ子には大飯食いと冬には江戸に出稼ぎにいく人が多く、そ そんな信州人の印象を持つ江戸 山の国から来た粗野で鈍重な人間

### 田毎程信濃へ団子盛ってやり 五六杯喰らって伯母を捨てに行 大食の国は月までたんと見え

戸でも知られていたということです。 **裹を返せばそれくらい「田毎の月」は江** るんだとか、えらい言われようですが、 だから一つしかない月もたくさん見え そして、さらしな姨捨にまるわる狂歌 「田毎の月」を文字った川柳。 2句目と3句目は信濃の国の自慢であ

さんの「姨捨いしぶみ考」からです。 百紹介されています。<br />
一つは 姨捨文学研究の第一人者矢羽勝幸

**入月をおしむ心のあらはれて**もう一つは真顔の弟子の高住の作。惜しんでいた様子がうかがえます。 それゆへこの歌も狂歌というジャ

の境内にある、 が立ち寄った長楽寺(千曲市八幡姨捨) びしているように感じた心の動きを詠ん だったとき、 の向こう側まで覗きたいくらいの気持ち んでいくのが惜しくて、背伸びして山 んがの場面が浮かぶ歌です。 これら2首は歌碑となって、 地面に映る自分の影も背伸 月見堂の近くに建って 松尾芭蕉